九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

町田三郎著『秦漢思想史の研究』

有馬, 卓也
九州大学大学院

https://doi.org/10.15017/18093

出版情報：中国哲学論集. 11, pp.90-96, 1985-10-10. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

〈書評〉

町田三郎著『秦漢思想史の研究』

有馬卓也

本書は、金谷治氏の『秦漢思想史研究』以降、まとまった形ではほとんど成果らしきもののなかった秦漢期の思想を取扱ったものであり、特に武帝から王莽抬頭に至る前漢中末期の政治的・社会的思想の経緯を論じたものとしては、初めての論著である。

一

まず本書の目次を掲げておく。

序　秦漢思想史への視角
第一章　統一への序章
一　戦国末の思想界について(一)――『荀子』と『韓非子』　二　戦国末の思想界について(二)――『管子』と『呂氏春秋』
第二章　統一の思想
一　雲夢秦簡ノート(一)　二　雲夢秦簡ノート(二)　三　秦の始皇帝について　四　李斯について　五　漢初の思想界について　六　儒教国教化について
第三章　『塩鉄論』の世界
一　散不足篇について　二　散不足篇の「中者」について

第四章　前漢中末期の思想
　一　宣帝期の儒教　　二　楊惲の死　　三　哀帝期のこと　　四　劉向論　　五　揚雄について(一)
　六　揚雄について(二)
第五章　道家の思想
　一　管子四篇について　　二　道家思想について

それでは以下、各章の内容を紹介し、氏の研究を明らかにしてみたい。

二

第一章――春秋的体制・秩序が崩壊し、暗君乱主が相次ぎ、巫祝禳祥が横行した戦国期、諸子百家はこぞって安定した国家社会の新しい秩序体系を確立せんと模索探究・試行錯誤する。かくの如き諸子の中で、『荀子』は連続的歴史観及び「礼」を以て核とし、世界経済圏構想や後王思想を説き、『韓非子』は断絶的歴史観及び「法」を以て人情を超えた力の政治を主張し、統一の青写真らしきものを提出するが、或は具体性に欠け、或は経済説が欠如し、その役割を完全に果たし得るものではなかった。そして『荀子』『韓非子』のように排他的に自己主張をする戦国的思考は、学問自体が複雑化・総合化していくとき、結局は限界につきあたるものであった。そのような中で斉・秦の地に於て諸家を兼修してヨコ組みの共通理解を求め、戦国期の学問的ゆきづまりを打開せんとする『管子』『呂氏春秋』という書が生まれる。両書はともに「時令説」(『管子』幼官篇・『呂氏春秋』十二紀)を以て核とし、自然秩序から人事を経編して行動予定をくみ、国家を富強せしめんとする。しかし時令思想は「循環」の思想であり、「古今一如」の思想によるものである。この同じことのくり返しを言う歴史観から、今日の特殊性を導きだすことはできない。これも戦国的発想の限界内にとどまったものであり、次なる統一の時代の青写真とはなりえなかったのである。秦漢帝国は全く思想的基盤を欠いた上に成立せねばならなかったのである。

第二章――青写真なきまま戦国の超克として成立した秦帝国は、皇帝支配・中央集権的官僚制・群県制等々、以

後二千年の中国の国家構造の基本形を創始するとともに、中国の領域を画定した。本章では、その統一の経緯を三節「秦の始皇帝について」の『史記』始皇本記からのアプローチを中心として、それを一・二節の雲夢秦簡からのアプローチ、四節の『史記』李斯伝からのアプローチをもって補足している。

秦帝国はその統一を歴代の祖の加護によるものとしながらも、始皇一身の功業として意識し、そしてその威徳を頌するものとしての巡狩・刻石をたび重ねて行った。そして荀子から「帝王の術」を学び、その実現化をはかる李斯とともに皇帝・官僚による郡県支配体制を確立し、それを補完する為に法家的立場からの典礼法制の整備、度量衡の統一、新文字の制作施行といった文化・制度の統一を行なったのである。その統一された国家の状況は、雲夢秦簡「編年記」「語書」「為吏之道」等々からも理解されるものであり、中央からの指令が迅速に末端社会まで伝達され、『荀子』の強調する礼が単なる理論の域にとどまらずに現実の国家社会に於て作動し、また官僚も十分に郷村へ融和していたようである。しかしながら、不断に「皇帝」であることを証明しつづけねばならなかった論理的に不安定な皇帝観、或は巫祝禨祥を信仰する風潮に逆行した『荀子』『韓非子』風の合理的支配（高祖伝説に代表されるような鬼神の力をも借りた支配の欠如）、政治に人民の参加を許さない政治的柔軟性の欠如、等々さまざまな問題が突出し、秦帝国はわずか二十年余りで滅亡する。

次の五・六節に於ては、漢高期より武帝期に至る支配体制の補完・改制を中心に、その背景となった思想について言及する。受命して新たに王朝を興した漢王朝は、天への回答が改制である以上、秦の制度をそのまま継承してはならない立場にあったわけだが、即座に新理念を生み出すことは不可能であった。そこで秦の無機的な制度・技術を思想化することによって継承する。

漢初思想界の中心は文景期であり、それはある面では「寛大なる長者」たる漢高体制に基づく平和と蓄積の時代ではあったが、一面、消極的保守的性質をもつ道家的無為休息の治政では対応しきれないさまざまな問題（たとえば諸侯国問題や匈奴問題等々、国の内外の問題が相互に連動していた）が芽ばえつつある時期でもあった。武帝は、もはや通用しなくなった「高祖の約」に基づくこの漢高体制を、否定ではなく補強という形をもって継承した。そして中央集権体制を完成し、皇帝支配を確立するという使命を負って儒教一尊体制を中心としてさまざまな改制を行う。国

教化された儒教は実務中心のものであり、換言すれば、権威を有する儒家思想によって法家思想を偽装したものであった。そしてそこに災異説を導入することによって、民衆（賢人）の政治への参与が可能となり、秦帝国がなし得なかった政治的フレキシビリティを獲得できたのである。そしてこれらは武帝個人の能力のみによるものではなく、文景期がその模索期としてあったからこそなのである。

第三章――武帝の対外政策による赤字を建て直さんと、元狩五年、塩鉄権酤の制が施行され、昭帝の始元六年に塩鉄会議が催される。その議事録とも言うべき桓寛の『塩鉄論』が世に出る。

「散不足」について、氏は第一節に於てそれを管子学団のテクニカルターム「羨不足」であるとし、買占めと投機を意味する所謂市場操作であるとする。その内容は中ほどを占める市場の実態調査を中心とし、原則論・抽象論を展開する『韓非子』とは明らかに異なる統計調査に基づく具体的資料である。また第二節に於ては、奢侈におもむきつつあった昭宣期、新経済階層として抬頭し社会の各層と密着しつつ核的な作用を果たした富裕階級に次ぐ「中者」について言及する。彼らは奢侈の流行を促進すると同時にその抑制も行うほか、土地への投資なども行い、それが従来からの豪族・高級官僚らの土地兼併とあいまって、農村社会の危機的状態はますます進行していった。

第四章――武帝以来の経学一尊の世界は時代を経過するにつれて拡大滲透し、万事がこの世界内の秩序において考えられるようになった。かくの如き状況の中で、漢王朝衰退の様をさまざまな角度から本章は考える。

武帝期における儒教は、秦漢の際に散佚した古典籍の蒐集整理、及び秩序論・天人論・道徳論としてのそれであった。しかしやがて経の解釈も分化し、経義が一人歩きするようになった。所謂章句の学としての儒教であり、それは同時に学問の禄利への堕落でもあった。特に元帝期に於て儒教偏向が最も甚だしくなる。そのような状況は皇帝の存廃をも経義によって可能な時代を生み出した。霍光による昌邑王賀の廃位宣言がまさにそれにあたる。その後帝位に即いたのが宣帝である。

中興の主とされる宣帝は、相坐法の廃止・増俸の詔・常平倉の設置・石渠閣の議等々を実施するかたわら、酷吏も温存多用するという所謂王覇雑揉の政治を行った。その当時、政界に参与していた人物の中に、霍光の媒介をいちはやく知り、その対策を講じ、宣帝期には光禄勲にまで至る楊惲がいた。彼は、万事を祥瑞によって合法化し、神秘思

想へと傾倒していった宣帝を嚴延年らとともに諫めるが、そのことによって庶人に落され殺されてしまう。これは中興の主として賞賛される宣帝の暗部を照射する事件であった。そして手前勝手に自己の正当性や政治の切り札として天を利用乱発することによって、天の権威を失墜せしめた宣帝が次なる時代へともちこした大きな問題だったのである。

外戚の権力の増大、官僚機構の弛緩、淫祠左道の流行等々さまざまな問題が突出してきた前漢末期、最後の皇帝として即位したのが哀帝であった。哀帝期に於ける思想史的問題として、(1)具体的事実を今文よりも明確に有し、しかも「義理章句」を備えている古文の劉歆による顕彰及び立学の上奏、(2)当時を「中衰」「大経」であると意識し、天下の更始・自新を求めた夏賀良を中心とした一派の再受命説、(3)仮定された事実にすぎなかった禅譲を具体的な歴史事実として一歩近づけた哀帝の董賢への禅譲論争などがある。これらはすべて王莽期に於てより顕在化し、具体的な展開を示すものである。宣帝以降、かくの如き諸問題に参画してきたのが劉向・歆父子であり、また揚雄であった。劉向の儒教独善の否定に基づく文化の総合統一化・災異の予言化の否定・禄利の学として学問を受けとめていた儒生らへの反発、等々の行動は、常に時の政治と密着していたものであり、またそれは彼自身がその一族でもある劉氏政策の安定化を目ざす所のものであった。また揚雄のなした『太玄経』は、当時ゆきづまりの様相を呈していた漢易に新たな展開をもたらしたほか、「文儒」の容認及び災異や讖緯の二次性などを世に示し、所謂「新儒教」の体系化を行ったものと言える。さらに彼は王莽期には『法言』をなし、「孝」による世界観を提示しつつ王莽期の肯定讃美をも行っている。

第五章――漢初に於ける道家思想は、当初の直接的現実的な国家あるいは身体の保全から、しだいに『老子』『荘子』の学術への深化展開へと推移する。従来諸説粉々としていた『管子』四篇についても、経と解という形式、そして解の経に於て説かれた原理的道の法家的思想による解釈、及び『荘子』の理法的世界を『老子』の本体観から説明づけようとする立場等々から考えると、漢初道家の作品であろう。また当時の道家思想は、日常的なものへの解体が進み、四篇が実践規範として説く「中」はまさにその典型であると言える。またそれは同時に道の目的的性格の喪失であり、道家思想の衰弱と崩壊であった。

やがて中末期に至って道家思想は表舞台からは姿を消すものの、『老子』の言葉は世間に広く常識化して伝わり、『漢書』や『塩鉄論』などに『老子』を典拠とする語が多く見られるようになる。また『荘子』の思想は賦などの文芸的側面に於て語られるようになる。いずれも独自の形で分化し、より深い理解へと進んでいったのである。

三

以上が本書の概要である。次に本書の特色について簡単に触れてみたい。

日本における従来の秦漢思想研究は、董仲舒を中心とした儒教関係のものと、『淮南子』を中心とした道家関係のものとに大きく二分され、それがまた各々細分化されるという個別的なものが主流であった。しかしながら、これは戦国諸子へのアプローチ方法をそのまま継承したものであり、断片的・閉鎖的なものになりがちな傾向を有する。これでは思想が現実に制度となり、思想がそれ自体独立したものとしては語られ得なくなった秦漢期の思想を流れのある思想史として描くことはできないのである。

かくの如く政治・経済と複雑に連動している秦漢思想に対し、氏はまず中国哲学史的アプローチを補完するために東洋史的アプローチを導入した。このことによって、従来の思想史研究ではさほど問題視されることのなかった政治・経済上の問題（巡狩刻石・「中者」・外戚等々）も、より生々しく描かれることになった。加えて氏は、さまざまな視点から同一問題を考証するという方法をとっている。すなわち、本書の骨子をなしているのは二章三節「秦の始皇帝について」、五節「漢初の思想界」、六節「儒教国教化について」及び四章一節「宣帝期の儒教」、三節「哀帝期のこと」であり、これら以外の各章各節は、すべてこれらを補説するために、別の視点から同時代を語ったものとなっている。たとえば、二章の一・二・四節は、三節を補説している。このように多様な観点からのアプローチをもって著述された本書は、従来の一面的な研究のゆきづまりを超克し、先の東洋史学的アプローチとも相俟って、実に複雑な秦漢思想を生きたままに、換言すれば思想の能動性・有機性を破壊することなく描き得たのである。この点において、氏は「先秦諸子や儒家の思想が、壮大な秦漢帝国を舞台にしてきたその時代と関わりつついかに展開し変容

していったのか、その終始を跡づけてみたい。（あとがき）」という氏の念願をはたし得たものと言えよう。

紹介者が本書に対し、唯一気付いた点があるとすれば、漢武期の儒教一尊体制確立の裏側からの視点として、司馬遷及び淮南王劉安の思想史的位置については、一節をもうけて氏の見解を今少し詳細に述べていただきたかったということである。そうすれば、五章「道家の思想」がより鮮明な形で語られたのではあるまいか。また紹介者の個人的希望としては、特に『淮南子』について、その道家的思惟による統一をめぐって未だ説が定まっていないだけに、その外郭だけでも氏の見解をまとまった形で本書の一部としてさいていただきたかった。

最後にまとめとして本書のもつ意義について簡単に述べておくと、本書は思想を時の政治・経済と十分に関連させることによって、今までその雑駁性のためにややなおざりにされていた感のある秦漢期（特に武帝期以降）の思想に、初めて史的展開と主とした座標軸を設定したものである。今後、その座標軸に基づき、より詳細にその思想性・本質性を探究していくのが氏の課題であろう。

（尚、「創文」No. 257に池田秀三氏の書評が掲載されている。参照されたい。）

昭和六十年二月　創文社発刊　総頁数四三四　定価七〇〇〇円